

伊藤孝一没後50年

## 山岳映画誕生

大正末、雪の絶巔にカメラを廻す

- 主催：市立大町山岳博物館
- 会期：平成16年10月2日～12月5日
- 会場：市立大町山岳博物館 1階  
ホール・特別展示室
- 企画協力：富山県 [立山博物館]

### 開催にあたって

#### 忘れ去られた登頂記録

東京三鷹、昭和29年4月17日、日本の登山界にいくつもの重要な業績を遺して、ひとりの日本男児が波乱に充ちた生涯をひっそりと閉じた。その名は伊藤孝一。享年62。

大正時代。伊藤は、出版物に山の写真を提供し、ヨーロッパから山岳映画を輸入公開、また、日本山岳会に資金援助を行うなど、日本の登山界に大きな貢献を果たした。そして、伊藤、「山」を介して堅い絆で結ばれた百瀬慎太郎・赤沼千尋と、その仲間たちは、

- 1 上ノ岳積雪期初登頂：1923年12月5日
- 2 薬師岳厳冬期初登頂：1924年2月4日
- 3 奥黒部一槍積雪期初縦走：1924年3月31日-4月21日

という三つの輝かしい記録を日本近現代登山史上に樹立するのだが当時山岳界の主流に身を置くことのなかった伊藤たちの業績は、山岳界に無視され、忘れ去られた。

正当な評価を以て日本登山史年表に彼等の名が明記されるのは、ずっと後になってからのことだ。

そして、伊藤たちの壮挙から80年、伊藤が没してから50年の歳月が流れた。

### 謝 辞

この企画展を開催するにあたって、次の方々から格別の便宜をはかっていただくとともに、さまざまなご教示を得ました。ここに記して謝意を表します。(敬称略・五十音順)

#### ○ 個人

赤沼淳夫	赤沼皆子	井垣真理	井垣美和	伊藤都留子	伊藤正治	岩垣裕一
江幡重實	岡田 汪	神子嶋能明	神子嶋俊子	日下部水穂	黒岩俊夫	小松和子
櫻井幸雄	榊 弘	高木三郎	竹内北子	千葉彬司	寺島嶺一	中垣理子
北川欣一	服部信之	羽田栄治	前田明徳	松岡朋子	松下泰子	百瀬 堯
八木信忠	矢野 進	吉井亮一	米原 寛			

## ○ 団 体

北アルプス広域連合

世田谷区立世田谷文学館

中日映画社

中日新聞社

東宝株式会社東宝スタジオ

富山県立図書館

株式会社ナックイメージテクノロジー

日本大学芸術学部

●この企画展は富山県〔立山博物館〕との共同企画により開催した。

## 展示解説

### 1. 伊藤隊の映画撮影機

伊藤隊は「立山、針ノ木越え」・「薬師・槍越え」で複数の35mm手廻し映画撮影機を用いた。

その1台は、アンドレ・ドゥブリ社製（フランス）のバルヴォである。バルヴォにはいくつものモデルがあり、伊藤隊はこのうちバルヴォK型を用いたといわれてきた。だが調査の結果、伊藤隊のバルヴォは必ずしもK型と特定できないこと、また、厳寒の中での使用を考えると、筐体は金属製ではなく木製の可能性が高いことが判明した。

もう1台もこれまでは同型のバルヴォと考えられてきたが、これはバルヴォではなく、詳細は不明ながら、イギリス製のウィリアムソン、ないしはこれに類似する木製撮影機であることが判明した。

#### ①35mm手廻し映画撮影機 35mm Hand-Cranked Cin camera 参考展示

大正末期、伊藤隊が二つの大規模山行に用いた35mmシネカメラ（撮影機）は失われたと推定される。

伊藤隊のカメラはここに参考展示する2台のバルヴォ映画撮影機に極めて近い型のものであったと推定される。

#### 資料 1 Le Parvo Série 0 No2111（木製バルヴォ）

（株式会社ナックイメージテクノロジー蔵）

35mmシネカメラ Andre Debrie社製

#### 資料 2 Le Parvo Modele K Série J1 No3582

（東宝株式会社東宝スタジオ蔵・世田谷区立世田谷文学館寄託）

35mmシネカメラ Andre Debrie社製

#### 資料 3 Parvo専用三脚・雲台（日本大学芸術学部映画学科蔵）

Andre Debrie社製

#### ②伊藤孝一の16mmシネカメラ

伊藤孝一が昭和に入ってから用いたもの。赤沼千尋も同じものを所有した。百瀬慎太郎も所有した可能性がある。

この16mmシネカメラは、伊藤家の家族旅行や、伊藤家・百瀬家の家族登山、伊藤・百瀬・赤沼の上高地行などを記録するのに用いられた。

## 2. 波乱に充ちた生涯

伊藤孝一は、明治25(1892)年4月12日、名古屋に生まれた。孝一が9歳の時、父が急逝する。伊藤家には嫡出の跡継ぎがなく、孝一は庶出の身であったが、このとき生母のもとを離れ、京屋吉兵衛7代目を襲名する。

京屋吉兵衛すなわち伊藤家は、代々尾張徳川家の御用商人を務め、問屋業、両替商などを掌握して莫大な資産を築き、伊藤殖産合名会社を創立してその資産を運用した。

伊藤は、名古屋の旧制中学に入学の後、故あって金沢の旧制中学に転入するも中退。このころを回顧した伊藤の随筆には、当時、伊藤がさまざまな想いを抱えて苦悶していた様子を垣間見ることが出来る。

家督を自由に出来る立場になると、伊藤はさまざまな「遊び」に手を染める。昂じて、酒色におぼれることもあったという。だが、さまざまな「遊び」はやがて、趣味の域を越え、独学で、あるいは師に就き、多分野に学んでその才能を開花させることになる。

例えば、伊藤の古典文学コレクション「甘露堂文庫」は現在、その主体部が國學院大學図書館と蓬左文庫とに分かれて収蔵されるが、これは日本古典研究の重要資料といわれる。登山と山岳映画については、伊藤がなしたことの先進性と独自性は、画期的なものであった。

後年、伊藤は、正規に学業を修めきれなかったことを悔いていたという。この後悔をバネに、伊藤の好奇心はさまざまな分野の精髓を自家菜籠のものにしてゆく。それ故であろうか、遺された伊藤の業績には、跋扈的ではあるかも知れないが、知性と感性とが織りなす不思議な調和と独特の共鳴の履歴が見て取れる。

昭和6(1931)年、国策事業ともいうべき中川運河の建設に端を発した国との裁判に破れて、伊藤殖産は破産、伊藤は、ほぼすべての資産を失う。そうして、さらなる不幸が重なる。昭和8年に、伊藤は長男を失うのである。

昭和19年、伊藤は、戦禍を逃れて、信州に疎開する。山の盟友、赤沼の周旋であったという。はじめ松本に、翌20年には有明に転居し、やがて一ノ瀬の茶屋を買取って春から秋の住処とするのだが、運命は苛烈であった。信州でも、伊藤は最愛の家族を次々に失っていく。昭和19年に妻、20年に次男、21年に生母、25年に三女を失う。また、24年にはかけがえない友、百瀬慎太郎を失う。

伊藤を取り巻く過酷な状況を背景としながらも、この時期に生み出されていったのが、神子島正雄の孔版印刷技術に依拠した一連の私家版出版物(『山啄木鳥』、『間遊美』、『ちぎれ雲』、『狸囃子』ほか)である。著名な山岳随筆に比肩しうる内容と質を有し、独特の澄みきった作品世界を創出するに至っていて、矚目に値する。

昭和26年10月、伊藤は東京三鷹に転居する。暗い想いを払拭し、穏やかな日々の生活を希求してのことであつたらうと推察されるのであるが、翌27年には次女を失い、3年後の昭和29年4月17日、伊藤自身が62年と5日の生涯を閉じることになる。

伊藤孝一は、多摩霊園にほど近いとある寺院の墓地に眠っている。墓碑正面に「伊藤家」の刻字はなく、次の四文字のみが刻まれている。

「俱會一處」。

### 3. 本格的雪山映画の誕生

伊藤が「遊んだ」いくつもの「趣味」あるいは独学分野のなかに、登山も映画もあった。大正5年には日本山岳会へ入会(会員番号:481番)。大正11年には高瀬渓谷で映画を撮影している。そして、翌大正12年の1月から3月、世に言う「雪の立山、針ノ木越え」を、同年11月から翌大正13年の4月にかけて「雪の薬師、槍越え」を、伊藤は山の盟友、百瀬慎太郎、赤沼千尋とともに実行に移す。

前者で、伊藤は、日本初の本格的な雪山登山記録映画「日本アルプス雪中登山」を制作した。日本初の本格的ドキュメンタリーとも言えるこの映画は、関東圏・中部圏を中心に上映されて好評を博し、ついには宮中に献納された。ドキュメンタリーの父 R. フラハティの代表作「極北のナヌーク」に遅れることわずかに1年。当時の日本にドキュメンタリー映画の概念はまだない。

後者では、伊藤は大正12年の夏から雪山行の準備を進める。「立山、針ノ木越え」では既存の小屋を利用できたが「薬師、槍越え」の行程上に小屋はない。伊藤は、その小屋(拠点)を造ることから、この山行を始めたのである。こうして真川の小屋(根拠地)、上ノ岳の小屋、黒部五郎の小屋、薬師沢の小屋掛けが造られた。これら新設小屋を足掛かりに、彼等は3回の雪山行を実施し、冒頭に述べた記録を日本登山史上に樹立する。雪山を目指したパイオニア達、それを支えた山案内人達の活躍、当時の服装や装備、変貌前の僻村有峰の風景など、準備を含む全行程が克明に写し込まれた。残念ながら、この映像は、伊藤の生前には鑑みられることなく忘れ去られていく。

### 4. 伊藤孝一は、何故、山の映画を撮ったか

伊藤孝一は、何故、山の映画を撮ったか?その的確な答えはおそらく永遠に得られない。伊藤の山岳映画、それは様々な偶然と必然が伊藤の裡に共鳴し、ある意図の表出として象<sup>かたち</sup>を成したものである以上、答えは幾通りも可能だろうし、そのうちの数少ない断面のみが言葉で表現できるに過ぎないからだ。伊藤の存命中であっても、「何故」の核心に迫るのは容易ではなかったに違いない。

それでは、核心に近づく手掛かりは何もないかというところではない。伊藤の随筆「北越廻り」(「狸囃子」15-21頁)の中の次の一条は、注意して読まれるべき一文である。

一、吾等の製作する映画は、吾等及参加雇人並に其家族等の爲めの記念撮影にして、他に何等の意味を有せず。

これは新聞記者に対して登山・撮影隊の立場を表明するために、百瀬慎太郎が手帳に「認めた」趣意書<sup>しゆいしょ</sup>の一条として当該随筆に登場する一文である。

もとより、赤沼千尋の「やまけら」も伊藤孝一の「狸囃子」も、その記述すべてを事実と見なし、無批判に「史料」として扱うことは慎まねばならぬ。記述内容の事実と否とはさておき、これらが随筆という「作品」である以上、そこでは、虚構が「作品」を生み出す重要な仕掛けとなるのは明白なことだからである。伊藤も赤沼も、このことは良く心得ていた。

しかも、伊藤隊の映画「日本アルプス雪中登山」は各地で熱狂的に迎えられ、宮中に奉納されるまでになる。だからこれまで、この一文に出会った人たちは、その意味にあまり関心を払わなかった。「吾等及参加雇人並に其家族等の爲めの記念撮影」などと言われても俄<sup>にが</sup>には信じがたい、というわけである。

だがしかし、虚構を必要としない書簡類の記述などと整合性を確認できるに到った現在、この一文の意味は、文字通り、素直に読まれるべきであると判断せざるを得ない。

この一条が、百瀬の手帳に実際に記されたかと否にかかわらず、伊藤孝一は、そこに本心の吐露を仮託したのではないか。伊藤の没後50年を経て、同時代からの離脱が完了したと見てよい現在、ようやく見えてきたものは、企ての背景に、通奏低音のように響き続けた伊藤孝一の家族愛の姿である。

資料 5 富山日報の記事 (パネル)

大正12年2月20日(火) 5面

「雪の立山を天下に紹介すべく 名古屋の素封家伊藤孝一氏一行 活寫隊を随へスキー横断計畫二十一日黒部着豫定」

資料 6 富山日報の記事 (パネル)

大正12年7月11日(水) 3面

「伊藤孝一氏撮影 立山活寫 十三四日總校 山岳...記録...天覽」

## 5. 伊藤孝一の遺した道具類

### 山の装備

伊藤孝一が山行に用いた装備で今に伝わるものは僅少で、そのほとんどが現在、市立大町山岳博物館に収蔵される。

#### 鉈

・ ・ ・ 父の鉈の柄は一ノ瀬へ来てから作ったもので「祈山神」と彫っており、腰に結ぶ紐は鼓しんべん調緒であった。今は茶褐色になっているが、その頃は赤が鮮やかで妙に粋だった。

(伊藤都留子著「上ノ岳へ 父の足跡をたづねて」より)

#### 釣具

伊藤孝一には幾多の趣味があったが、その一つに釣りがある。自作の浮子、自作のたも網が残されているが、いずれも手の込んだ作りのもので、伊藤の傾けた情熱を今に伝える。

資料 7 伊藤孝一のランタン STONEBRIDGE FOLDING LANTERN  
(市立大町山岳博物館蔵)

資料 8 伊藤孝一の携帯用木枠水銀寒暖計 (市立大町山岳博物館蔵)

資料 9 伊藤孝一の万歩計 (BEPOSE) (市立大町山岳博物館蔵)

資料 10 伊藤孝一の携帯用方位磁石 (市立大町山岳博物館蔵)

資料 11 伊藤孝一愛用の鉈 (個人蔵)

資料 12 伊藤孝一自作の浮子 (個人蔵)

資料 13 伊藤孝一愛用の釣竿 (個人蔵)

資料 14 伊藤孝一愛用の釣竿 (個人蔵)

資料 15 伊藤孝一のステルカメラ

R. B. AUTO GRAFLEX EASTMAN KODAK CO.

(市立大町山岳博物館蔵)

資料 16 伊藤孝一のカメラ三脚 (市立大町山岳博物館蔵)

## 6. 伊藤孝一の日本古典文学コレクション—甘露堂文庫

安田財閥のコレクションと双璧を成すと謳われた日本古典文学の文庫。現在、その主体部は、國學院大學図書館と蓬左文庫内の尾崎文庫に収蔵される。

『甘露堂文庫稀観本攷覽』は日本文学における伊藤の師匠、尾崎久彌が、その概要を解説したものである。

資料17 『甘露堂文庫稀観本攷覽』 尾崎久彌著 (個人蔵)

## 7. 伊藤孝一の孔版印刷冊本等

疎開先の信州有明で、神子島正雄の孔版印刷技術に出会った伊藤は、幾冊かの私家版和綴冊子本を上梓した。

それらが、伊藤孝一の随筆集『狸囃子』、赤沼千尋の随筆集『山啄木鳥』、同人誌『間遊美(眞弓)』、『ちぎれ雲』などである。いずれも伊藤の心情、文章表現ほかを知る上に貴重な資料となっている。

資料18 『狸囃子』上 伊藤孝一著 昭和26年5月20日発行 (市立大町山岳博物館蔵)

資料19 『狸囃子』下 伊藤孝一著 昭和26年5月20日発行 (市立大町山岳博物館蔵)

資料20 『間遊美(眞弓)』一 硯友社発行 (個人蔵)

資料21 『間遊美(眞弓)』二 硯友社発行 (個人蔵)

資料22 『間遊美(眞弓)』三 硯友社発行 (個人蔵)

資料23 『ちぎれ雲』 伊藤孝一著 (個人蔵)

資料24 『山地植物』 伊藤孝一著 (個人蔵)

## 8. 山の盟友 —伊藤孝一・百瀬慎太郎・赤沼千尋—

伊藤孝一は大正初期から山歩きを始める。それは狩猟による山野<sup>54</sup>跋渉<sup>55</sup>の延長線にあったようだ。度重なる富士行を手始めに、足跡は南アルプスへ、北アルプスへと延びる。そして程なく、孝一は、百瀬慎太郎と赤沼千尋に出会う。山を介して結ばれた友情は、そのち生涯を通して続くことになる。

当時、百瀬慎太郎は、信濃大町に父の営む旅館對山館にあって、大町山案内人組合を組織した異色の歌人であり、赤沼千尋は文筆に堪能で、燕岳に燕山荘を営む山小屋の経営者である。三人の交友がいかに濃やかなものであったかは、たとえば、赤沼千尋の随筆集『山啄木鳥(やまけら)』の伊藤孝一による「あとがき」などによって知れるが、この三人が、さまざまに役割を担いながら、大正12年から13年にかけて、破格の規模で雪山登山撮影行が実行に移されることになる。さらに、山行に際しては、勝野銜四郎、奥村吉松など、秀れて魅力的な男たちが三人の脇を固め、優秀な山案内人が集められた。越中山案内人と信州山案内人の<sup>34</sup>菁<sup>35</sup>力と知恵を頼みに、彼らを巧みに統率しながら、あたかも一陣の風のように立山黒部領域を駆け抜けていった男たちの存在を、フィルムは克明に記録している。

資料25 上高地にて大正13年4月22日撮影と推定される記念写真 (パネル、個人蔵)

カメラ右側の中央3人、左から赤沼千尋・伊藤孝一・百瀬慎太郎

資料26 中村不折揮毫扁額『燕山荘』 (個人蔵)

中村不折<sup>なかむらふせつ</sup> (1866-1943) は、東京に生まれ、長野に育った洋画家である。本名は中村鉅太郎。長野で教職に就いたのち上京して洋画を学び、渡仏して研鑽を積む。帰国後は中央画壇で活躍し、行進の指導にも大きな貢献を果たした。書に造詣が深く、書家としても第一線で活躍、書道博物館を創設したことはつとに有名である。

現在、燕山荘のロゴ(意匠文字)に用いられるこの扁額の書は、昭和2年頃の揮毫。当時、不折は既に中央画壇に確固たる地位を築いた斯界の重鎮であり、当該扁額は、赤沼千尋が当時、どのような社会的ステータスで交友関係を持っていたかを象徴するものである。

資料27 百瀬慎太郎揮毫掛軸 (個人蔵)

「霧あつく流れて白き鷹狩の尾上は見えず秋深みつ、 慎」

この掛軸は、百瀬慎太郎が、ふるさと大町の風景の象徴、鷹狩山を詠んだもので、生前、伊藤孝一に贈ったものである。

鷹狩山北方稜線鞍部には東山乗越のスキー場があった。伊藤・百瀬・赤沼にとっては、スキー練習に汗を流した思い出の場所である。百瀬と伊藤にとって、鷹狩山を中心とする東山低山山嶺の連なりは、お互いの交友の想い出と強く結びついた風景であった。

資料28 百瀬慎太郎短歌短冊 (個人蔵)

夏草のしげみに熟れし木苺を喰みつ、歩む霧の山みち (大正10年)  
秋の夜の酒は静かにのむべしと牧水の歌のなつかしきかな (作年未詳)  
スバリ岳荒き岩肌まざまざと画きてぞあり猪之吉の画は (作年未詳)  
梅雨はれの鷹狩山の落葉松ば緑こもりて郭公の啼く (作年未詳)  
疎開 火の山の裾ゆ移りて雪山のふもとの村に飯炊く君は (慎有恒への歌、作年未詳)

資料29 『山を想へば』 (市立大町山岳博物館蔵)

百瀬慎太郎遺稿集 発行所 百瀬慎太郎遺稿集刊行会 発行者 百瀬美江  
昭和37年8月15日発行

資料30 伊藤が百瀬に贈った経折写真帖 (個人蔵)

「後立山脈踏破に際し・・・」 大正7年の山行記念、大正8年贈

資料31 百瀬慎太郎宛伊藤孝一葉書 大正11年7月12日付け (個人蔵)

資料32 百瀬慎太郎宛伊藤孝一葉書 昭和23年9月21日付け (個人蔵)

資料33 山啄木鳥(やまけら) (個人蔵)

赤沼千尋著・伊藤孝一編 神子島正雄印刷・硯友社発行 孔版印刷と綴り木・私家版  
昭和25年8月1日編輯着手 同年10月15日製本完成

赤沼千尋の随筆集。巻頭口絵には「越中有峯村社宝前狢犬」の名称記述を伴う有峰狢犬8体のモノクローム写真が貼られる。また、狢犬が有峰を離れる経緯について、後年、これに関わる者たちを感ずることになる随筆作品「有峰悲歌」を収める。

この随筆作品に依れば、赤沼が「焼酎一斗と金一封を献じ」て狢犬を譲り受けたことになっている。しかし実際は、この随筆集を編集した伊藤が相当の高額で狢犬を購入している。

資料34 『山の天辺』 (個人蔵)

赤沼千尋著、特装第十八番

資料35 『山の天辺』 (市立大町山岳博物館蔵)

赤沼千尋著、並装版

資料36 上高地に遊ぶ 昭和5年6月6日

右より赤沼千尋、伊藤孝一、百瀬慎太郎、大井庄吉 (写真、個人蔵)

資料37 名古屋の伊藤家にて 百瀬慎太郎(右)と伊藤一家 (写真、個人蔵)

資料38 パルヴォを廻す勝野銚四郎 (写真、個人蔵)

資料39 燕山荘にて 左より赤沼千尋、伊藤孝一、山案内人櫻井一雄、一人おいて石川欣一  
(写真、個人蔵)

資料40 赤沼家の別荘「天溪洞」にて

右より赤沼千尋、百瀬慎太郎、伊藤孝一 (写真、個人蔵)

資料41 島々にて カメラを繰る伊藤孝一 (写真、個人蔵)

## 9. 信州有明の神子島正雄

神子島正雄は、東京から信州有明に疎開し、印刷業を興した。孔版多色刷りの浮世絵も手がけたという神子島の優れた印刷技術が伊藤孝一の目にとまり、『ちぎれ雲』、『狸囃子』、『眞弓』ほかを世に出す。その過程で伊藤を通じて赤沼千尋を知り『山啄木鳥』も手がけることとなった。

神子島は短歌をよくし、伊藤の三女、仲子とともに、安曇野在住の地方歌人として活躍した。

昭和38年ころ大町に拠点を移す。昭和54年1月、自ら主宰する季刊同人誌『耕』を創刊、第4号(55年)からは『狸囃子』所収随筆の抜粋転載をはじめた。

『耕』は第30号(82年)にて終刊。その発刊に最後の精力を注ぎ73歳で他界したという。

資料42 季刊同人誌『耕』 創刊号 (個人蔵)

資料43 季刊同人誌『耕』 2号 (個人蔵)

資料44 季刊同人誌『耕』 3号 (個人蔵)

資料45 季刊同人誌『耕』 4号 伊藤の『狸囃子』の抜粋も転載 (個人蔵)

## 10. 竹内鳳次郎・ヒサ夫妻の見送り

横浜の竹内鳳次郎は妻のヒサを伴って、大正中期の短期間に南北アルプスに足跡を印した。とりわけ大正9年7月の剷岳によって、ヒサは女性初登頂者となり、日本登山史に名を残す。

大町・對山館を基地とした二人は百瀬慎太郎らとも親交を深め、冬はスキーにも興じ、「雪の立山、針ノ木越え」では大沢石室まで見送りに同行している。

夫妻の山とのかかわりについては、岡田汪氏(甥)が竹内家に残された日記と写真をもとに全容の詳細をまとめ、最近公表した。

資料46 剷岳山頂の竹内夫妻(上) (写真、個人蔵)

大正9年7月30日

資料47 畠山小屋の竹内夫妻 (写真、個人蔵)

大正12年2月 右からヒサ、ひとりおいて鳳次郎、赤沼千尋

資料48 對山館土蔵の屋根にて (写真、個人蔵)

大正12年ころ(推定) 竹内鳳次郎撮影

資料49 信濃毎日新聞の記事 (写真複写)

大正12年2月22日

「針の木越え立山へ 雪のアルプス踏破 名古屋の人伊藤孝一氏が冒険  
立山また大吹雪襲来に富山縣より救護隊の準備」

「立山踏破隊に美人が加はる 女流山岳家竹内氏夫人 良人と共に甲斐甲斐しい扮装で伊藤氏一行大町を出發」

資料50 信濃毎日新聞の記事 (写真複写)

大正12年2月24日

「案ぜられる竹内氏夫妻一行」

## 11. I 雪の立山、針ノ木越え

大正12年1月12日-3月22日

大正12年(1923)の1~3月、伊藤孝一は、大町の百瀬慎太郎、有明の赤沼千尋とともに大規模な撮影隊を組織し、映画を撮りながら雪の立山・黒部を横断する。

この山行は、大正12年1月中旬の偵察行、2月下旬の立山、針ノ木越え(大町から入山；大沢から撤退)、3月上・中旬の立山、針ノ木越え(富山、芦峯寺から入山)の3行程からなる。

### I-0 偵察行

伊藤は大正12年の年明け早々に汽車で名古屋を立ち、3日朝、大町へ入る。その後の数日は乗越スキー場(大町)でスキー練習と映画の撮影を行い、12~15日、大沢石室の偵察行を実施する。伊藤は、14日に畠山小屋から大沢石室を往復して、その埋没状況を確認し、大沢からの針ノ木越えを決める。「大澤宿宮の自信、此處に確立す。」

大沢から戻った伊藤は、松本高校山岳部の山岳映画会などに係わって帰宅を延期するうち、21日、横有恒一行、立山で遭難、の報に接することになる。

### I-1 立山、針ノ木越え(大町から)

大正12年2月15日、伊藤は再び大町へ向かう。16日朝に松本へ入った伊藤は、同夜、有明の赤沼宅に泊、翌17日に百瀬の對山館に入る。19日、関係者が對山館に結集、翌20日に大町對山館を発、大出、畠山を経て、22日、大沢石室に達する。

荒天続きに沈殿を続けるうちに、立山温泉から差し廻しの芦峯峠(嘉左エ門、福松、宗作、政吉、忠太郎、鶴松、喜一、光次郎)が針ノ木峠を越えて大沢に到達する。伊藤は、行程の状況を聞き、前進を断念、再挙を富山方面より決行と断定し、28日、大町へ退却する。

### I-2 立山、針ノ木越え(富山、芦峯寺から)

2月28日の夜8時、對山館に戻った伊藤一行は、3月2日に大町を立ち、北越廻り(長野・高田経由)で3日に富山入り、翌4日に芦峯寺へ進み、5日に入山、7日には立山温泉に達する。ここを拠点に、10日に松尾峠へ往復して板倉勝宣終焉の跡を弔い、横隊の山上根拠地の雪穴を確認、15日には室堂へ前進して翌16日に立山御山登頂を果たし、立山温泉へ戻る。17日には温谷乗越を越えて平へ移り、21日に針ノ木峠を越えて大沢に泊、22日、ついに大町對山館へ帰着する。偵察行以来、全行程通算33日に及ぶ雪山行がここに完了した。

資料51 雪の立山、針ノ木越え行程表 (パネル)

資料52 立山、針ノ木越え、一行の趣意書 (パネル・縦書き)

伊藤孝一著『狸囃子』所収「北越廻り」より

- ・・・自然の美しさに憧れてある程度の難儀を覚悟で山に入るといふことはあるにしても、命とブルガエに山の景色を見るなどと、そんな非常識があり得るはずはない・・・
- ・・・百瀬の出した手帳には、
- 一、われらの第一目的は天地間の荘厳に接し、これを享樂するにあり

一、われらの第二目的は富山県中新川郡立山村大字芦峠寺を起点に、長野県北安曇郡大町に到達するにあり

一、われらが目的を達成するための行動は、臨機応変にして、期限と行程を定めず

一、われらは自然の雄大に対し、自己の弱小を認識して、決して冒険を成すべからず

一、われらは他の言動に誘発されて探検開発の類に墮すべからず

一、われらは必要と認むる雇人以外の参加者を交えず

一、われらの製作する映画は、われらおよび参加雇人ならびにその家族等のための記念撮影にして、他に何等の意味を有せず

と、書いてあった。私はすぐその次へ

一、われらは自然に対し徹底的に臆病たるべきこと

一、入山中、不幸にして参加人員中に非常の怪我人、あるいは病人を生じたる時は、ただちに全部の目的を放棄し、全員即刻下山すること書き加えた。・・・

\*表記は、現代仮名遣いに改め、一部の漢字表記をひらがなに改めた。

資料53 伊藤孝一 立山針ノ木越えノオト (個人蔵)

伊藤が残した山行の文字記録には、現地にて伊藤自身が備忘のために記録をとった「ノオト類」、ノオト類の記録をもとに、現地から家族へ送った手紙を纏めて綴った「手紙の日記」がある。

また、「薬師、槍越え」には、記録係の亀山清一に綴らせた詳細な業務記録日誌が存在している。これらに、伊藤が残した映像資料(映画)を読み解くにあたって重要な情報を提供してくれる。

資料54 伊藤孝一 「大正拾貳年 雪の立山・針ノ木越え 通信日誌 全」 (個人蔵)

資料55 百瀬慎太郎宛伊藤孝一書簡 雪の立山針ノ木越え覚1「大正拾貳年沓月(発端)」

(個人蔵)

資料56 百瀬慎太郎宛伊藤孝一書簡 雪の立山針ノ木覚2「木越え大正拾貳年参月」 (個人蔵)

資料57 百瀬慎太郎宛伊藤孝一書簡 雪の立山針ノ木覚3「左は廿一日ご投函の・・・」

(個人蔵)

資料58 雄山頂上付近の主稜を登る (写真、個人蔵)

資料59 雄山登頂 大正12年3月16日 (写真、個人蔵)

資料60 雪の針ノ木峠に立つ (写真、個人蔵)

## 12. II 雪の薬師、槍越え

大正12年11月27日～13年4月23日

「雪の立山、針ノ木越え」のあと、伊藤孝一は、さらに大規模な雪山行を計画する。その実現に向けて伊藤は、大正12年の夏、有峰の岩段家を借り上げ、燃料や食料などの確保、備蓄を計画的に進め、山行の足掛かりとするため、三棟の山小屋(真川・上ノ岳・黒部五郎)を新たに建設した。

そして、大正12年の11月から翌13年の4月にかけて、3回の雪山映画撮影行を実行する。これは、全行程積算日数88日に及ぶ日本初の極地法による登山の実現であった。

### II-1 第一回：上ノ岳行

大正12年11月26日に名古屋を発って翌27日に富山へ着いた伊藤は、大多和峠・有峰・小畑尾峠を経て、29日、真川の小屋へ入る。スキーの練習に日を重ね、12月4日には太郎兵衛平、12月5日には上ノ岳の新設小屋へ往復して赤牛近傍の連山などを撮影する。その後数日にわたって、小屋の生活などを撮影し、13日に真川の小屋発、14日に富山へ帰着する。行程通算18日に及ぶ上ノ岳行である。

## II-2 第二回：鉢伏越え、薬師行

年が明けて間もない大正13年1月9日、伊藤一行は再び富山へ入り、芦峯寺へ向かう。11日に芦峯寺発、鉢伏越えで有峰に入り(13日)、14日には真川の小屋に落ち着く。16日・19日には太郎山方面撮影往復、25日には小畑尾峠撮影往復と、撮影をこなし、天候をはかりながら薬師登頂の機を窺う。そして1月30日、真川的小屋から薬師頂上を目指すのが風尾根で退却。2月1日に上ノ岳の小屋へ前進して機を窺い、2月4日、薬師岳厳冬期初登頂を果たす。真川的小屋へ戻った伊藤一行は早くも2月6日には真川を発ち、8日には富山へ帰着する。行程通算31日に及ぶ、八伏越え、薬師行である。

## II-3 第三回：奥黒部踏破、槍越え

3月16日、三度富山入りした伊藤一行は、大多和峠を経て19日、真川的小屋に入り、スキー練習、小屋近傍の撮影などを続け、3月31日、上ノ岳の小屋へ前進、槍への踏破を開始する。4月1日から9日までは薬師沢に小屋掛・幕営して黒部川本流・雲ノ平を踏破、4月9日から15日までは黒部五郎の小屋を拠点に、黒部五郎岳、鷲羽岳、三俣蓮華岳の頂上を踏み、上高地からの百瀬サポート隊と合流する。15日には双六池に前進幕営、17日には殺生小屋に入り、4月19日に待望の槍ヶ岳頂上を踏んで、21日に上高地へ降り、23日、徳本峠を越えて松本へ帰着する。行程通算39日に及ぶ、槍越えである。

### 資料61 雪の薬師、槍越え行程表 (パネル)

### 資料62 伊藤孝一 真川的小屋設計図 (個人蔵)

伊藤孝一が自ら設計し、大正12年の夏から秋にかけて来るべき冬山縦走のために新設した、3棟の小屋(真川・上ノ岳・黒部五郎)のうち最大のもので、ここを伊藤隊は真川根拠地と呼んだ。

薬師岳山頂へ至る登山道は当時、有峰から小畑尾峠を越えて真川をわたり、太郎山の鞍部を経て薬師岳から西に派生する尾根の一つを辿るのだが、小屋は、この道が真川上流をわたる地点の左岸に建設された。

コニカルフードを備えた大きな囲炉裏、写真現像のための本格的な暗室、食糧・薪炭等の広大な備蓄空間を備え、戸外にはガス灯が点ったという。

すべて伊藤のシステムに依拠して大正13年に上ノ岳元旦登山を実施した藤木九蔵は、この小屋を「真川ホテル」と呼んだ。

### 資料63 伊藤孝一 大正十二年夏山ノオト (有峰狒犬購入の経緯が記される) (個人蔵)

### 資料64 亀山清一 「立山村横江、人夫亀山清一山日誌」 (個人蔵)

立山村横江野開(現、富山県中新川郡立山町横江野開)の亀山清一は、若くして片眼を失うという不利を克服してさまざまな職業を遍歴し、独学で読み書きを初歩から学び、後年、立山村の村議会議員を務めた。

「針ノ木越え」の報道によって伊藤隊の活動を知った亀山は、伊藤孝一に私淑するようになる。その夏、新聞記事によって伊藤隊の「薬師、槍突破(槍越え)」を知るに及び、知己を介して自ら伊藤隊へ志願してこれに加わる。芦峯寺と和田の山案内人以外で、伊藤隊での重要な役割を占めたきわめて例外的な人物である。

亀山は、「薬師、槍越え」で伊藤隊の全行程に参加して主に記録係と撮影補を務め、雇人側から見た伊藤隊の動向をつぶさに観察して具体的に正確・詳細な記録「亀山清一山日誌」を遺した。伊藤隊の全般にわたる組織化された動向がその記録から知れるばかりではなく、伊藤隊の雇主一雇人関係を知るに重要な手掛かりを遺した。

- 資料65 伊藤孝一 「真川・上ノ岳行、鉢伏越・薬師行 手紙の日誌」 (個人蔵)
- 資料66 伊藤孝一 薬師・槍ノオト 大正十三年四月 雪の鎗越え 自薬師沢 至三俣頂上 (個人蔵)
- 資料67 伊藤孝一 薬師・槍ノオト 大正十三年四月  
五郎小屋より五郎頂上行 槍越へ上高地迄 (個人蔵)
- 資料68 真川の小屋を出発、太郎山へ (写真、個人蔵)
- 資料69 真川の小屋前にて (写真、個人蔵)
- 資料70 真川の小屋内にて (写真、個人蔵)
- 資料71 薬師岳厳冬期初登頂 大正13年2月4日 (写真、個人蔵)
- 資料72 バルヴォを廻す勝野銚二郎 槍ヶ岳付近の主稜にて (写真、個人蔵)
- 資料73 槍ヶ岳山頂にて 大正13年4月19日 (写真、個人蔵)

### 13. 雪の立山、針ノ木越え 雪の薬師、槍越え 全行程 (フラットボード)

伊藤藤の足跡の一覧展示 (2万5千分の1地形図上)

- 資料74 対山館を出発 (写真、個人蔵)
- 資料75 畠山小屋へ到着 (写真、個人蔵)
- 資料76 大沢石室へ向う 大量の登山物資とスキーが目につく (写真、個人蔵)
- 資料77 芦峯寺雄山神社で安全祈願後 (写真、個人蔵)
- 資料78 浄土山腹を一ノ越へ (写真、個人蔵)
- 資料79 針ノ木谷をさかのぼる (写真、個人蔵)
- 資料80 黒部川 平にて幕営 (写真、個人蔵)
- 資料81 黒部川を渡る赤沼千尋 (写真、個人蔵)
- 資料82 有峰の集落 (写真、個人蔵)
- 資料83 上ノ岳の小屋にて (写真、個人蔵)
- 資料84 雪洞に休息する 奥黒部の主稜直下で (写真、個人蔵)
- 資料85 サポートの百瀬隊と合流する 三俣蓮華山頂にて (写真、個人蔵)
- 資料86 槍ヶ岳山頂へ (写真、個人蔵)
- 資料87 殺生小屋をあとに 上高地へ下山開始 (写真、個人蔵)

### 14. 展示映像について

「雪の立山、針ノ木越え」は約40分、「雪の薬師、槍越え」は約30分、全体としては約1時間10分の長さになります。

しかし、その一部をご覧いただくだけでも、当時の雪山登山の状況が理解していただけるようになっていきます。

なお、上映資料はすべてサイレントです。音声はありません。封切当時は、活動弁士(あるいは撮影当事者の誰か)による生の解説を附して上映されたと推定されています。

#### 資料88 映像展示「雪の立山、針ノ木越え」

(DVD版・TVモニター、富山県立山博物館提供)

大正12年1月-3月

約40分

この展示映像は、平成元年に羽田栄治によって再編集された上映版「雪の立山、針ノ木越え」

の全編である。

大正12年(1923)の1～3月、伊藤孝一は、大町の旅館、對山館の百瀬慎太郎、山小屋燕山荘を経営する有明の赤沼千尋とともに大規模な撮影隊を組織し、映画を撮りながら雪の立山・黒部を横断する。カメラは東海シネマ商会の技師、勝野銈四郎が担当、伊藤自身もカメラを廻した。

伊藤はまず、1月12～15日、大沢を偵察。ひと月おいて2月20日、大町から入山するも荒天に阻まれて断念。28日、大町へ戻り、計画を変更、3月2日に大町を発って、5日、芦崎寺から再度入山。立山温泉を拠点に、16日、立山登頂を果たし、21日に針ノ木峠を越え、22日、ついに大町へ帰着する。

この山行の映像記録は同年、伊藤自らの編集によって「日本アルプス雪中登山」にまとめられ、中部圏・関東圏を中心に各地で上映されて大評判となり、宮中に献納される。この映画のオリジナル編集版は行方不明となったが、後年、ネガフィルムが信州有明の赤沼家で発見され、平成元年に再編集された。これが現在の上映版「雪の立山、針ノ木越え」である。

資料89 日本アルプス雪中登山活動写真會入場券 (個人蔵)

資料90 映像展示「雪の薬師、槍越え」

(DVD版・TVモニター、富山県立山博物館提供)

大正12年11月～13年4月

約30分

この展示映像は、平成11年までに調査の終了した「雪の薬師、槍越え」に関する映像の素編集抜粋版である。

「雪の立山、針ノ木越え」のあと、伊藤孝一は、大正12年11月から翌13年の4月にかけて、3度にわたる雪山行を企てる。大正12年12月5日には上ノ岳冬期初登頂、大正13年2月4日には薬師岳冬期初登頂を果たし、越中から奥黒部領域を踏破して4月19日には槍ヶ岳の頂上を踏み、上高地に到達する。

伊藤は大正12年の夏からこの雪山行の準備にかかり、3棟の山小屋を建設した。このとき、有峰では狗犬8体をまとめて購入し、これを散逸から救っている。

これらの準備を含め、山行の全行程が映画に記録された。この映像記録は、昭和40年に名古屋の報道カメラマン上田竹三が見出すまで、信州有明の赤沼家で眠り続ける。上田が発見したのちも映像は断片的に公開されたのみで、未編集のまま撮影以来70余年を経過する。この映像には、雪の北アルプスに挑戦したパイオニアたち、それを支えた山案内人たちの活躍、当時の服装や装備、変貌前の僻村有峰の風景などが写し込まれ、資料映像としての価値はすこぶる大きい。

当該フィルム資料は、伊藤の遺した日誌等による考証を経て、2000年に立山博物館と羽田栄治によって作品化された。

## 15. 山案内人たちの装備

これらは、伊藤孝一の雪山撮影行の頃、山案内人たちが用いた装備、あるいは、時代を異にするがそれらと同様の装備である。

これらの装備に、セーターなど、わずかの支給品を加えたもののみで、山案内人たちは、厳冬

期を含む雪山で、伊藤隊の活動を支えた。

#### ①立山登山案内者の装備

- 資料91 山帽子 (個人蔵)
- 資料92 ばんどり (富山県立山博物館蔵)
- 資料93 スキー (富山県立山博物館蔵)
- 資料94 スキーストック(組違えのまま使用・遺存) (個人蔵)
- 資料95 熊 槍 (個人蔵)
- 資料96 こいすけ(雪鋤) (個人蔵)
- 資料97 背 板 (個人蔵)
- 資料98 背 当 (富山県立山博物館蔵)
- 資料99 荷 棒(ねんぼう) (個人蔵)
- 資料100 鳶 棹(とんべざお) (個人蔵)
- 資料101 ピッケル(志鷹光次郎が使用) (富山県立山博物館蔵)
- 資料102 て と(毛皮手袋) (個人蔵)
- 資料103 そっぺ(毛皮沓) (個人蔵)
- 資料104 尻 当 (個人蔵)
- 資料105 脚 絆(シナ皮製) (個人蔵)
- 資料106 かなかんじき (個人蔵)
- 資料107 輪かんじき (富山県立山博物館蔵)

#### ②大町登山案内者の装備

- 資料108 ツラナイ(てぶ皮) (市立大町山岳博物館蔵)
- 資料109 四乳草鞋(よんちわらじ) (市立大町山岳博物館蔵)
- 資料110 腹 掛 (市立大町山岳博物館蔵)
- 資料111 脛 巾(はばき) (中村源作が使用) (市立大町山岳博物館蔵)
- 資料112 ピッケル(大和由松が使用) (市立大町山岳博物館蔵)
- 資料113 荷 杖(ねづえ; 歩荷杖) (西沢彰が使用) (市立大町山岳博物館蔵)
- 資料114 背負子 (市立大町山岳博物館蔵)
- 資料115 かなかんじき(西沢彰が使用) (市立大町山岳博物館蔵)
- 資料116 輪かんじき(平林高吉が使用) (市立大町山岳博物館蔵)
- 資料117 着莫蓆(きごさ) (平林高吉が使用) (市立大町山岳博物館蔵)
- 資料118 リュックサック(大和由松が使用) (市立大町山岳博物館蔵)
- 資料119 スキーストック(黒岩直吉が使用) (市立大町山岳博物館蔵)
- 資料120 スキー(黒岩直吉が使用) (市立大町山岳博物館蔵)
- 資料121 蓑(みの) (市立大町山岳博物館蔵)

- 
- 資料122 案内人の後ろ姿 大正7年、伊藤作アルバムより (写真、個人蔵)
  - 資料123 昼をとる案内人たち 大正7年、伊藤作アルバムより (写真、個人蔵)
  - 資料124 休憩する案内人たち 大正7年、伊藤作アルバムより (写真、個人蔵)
  - 資料125 炊事風景 大正7年、伊藤作アルバムより (写真、個人蔵)

- 資料126 背負子 大正7年、伊藤作アルバムより (写真、個人蔵)  
資料127 わらじの束 大正7年、伊藤作アルバムより (写真、個人蔵)  
資料128 わかんをつける 山案内人櫻井一雄(右)と平林高吉 (写真、個人蔵)  
資料129 八方尾根にて 左は案内人櫻井一雄 (写真、個人蔵)  
資料130 若き百瀬慎太郎 右隣りは案内人大西又吉、左隣りは對山館の使用人らしい  
(写真、個人蔵)  
資料131 案内人 伝刀林蔵 大正7年、伊藤作アルバムより (写真、個人蔵)  
資料132 案内人の装束 黒岩直吉 (写真、個人蔵)
- 

- 資料133 雪の立山、針ノ木越え打ち上げ  
こたつを囲む5人が主要メンバー (写真、個人蔵)

## 16. 有峰狍犬

明治43年(1910)、辻本満丸が雑誌「山岳」第五年第一号に写真入りで紹介してのち、中央にその存在が知られる。制作年代が異なると推定される履歴未詳の木造動物像阿吡四対八体からなる。古いものは鎌倉期まで遡ると推定されている。

有峰の解村後、これらの狍犬は現地に放置されたままとなっていた。そのうち状態の良いもののみを富山の銀行家が購入する予定のところ、その価値を知っていた伊藤孝一は、交渉によって全8体を購入する。

伊藤は狍犬の散逸を危惧した。遺族の証言に依れば、生前、やがては富山へ帰るべきものだ、と語っていたという。

- 資料134 有峰狍犬 大山町歴史民俗資料館蔵 (写真、富山県立山博物館提供)

## 17. 伊藤孝一による「あとがき」 (パネル・縦書き)

(赤沼千尋著『山啄木鳥(やまけら)』、五八 - 六三頁)

伊藤孝一・百瀬慎太郎・赤沼千尋の友情を、垣間見ることのできる好文章である。  
長いが、あえて全文を展示に供する。

- 資料135 「あとがき」全文
- 

## 企画展関連事業

富山県立山博物館・市立大町山岳博物館・中日新聞社の共同主催で、次の事業を行った。

山岳映像企画2004 山岳映画の先駆者、伊藤孝一没後50年

**山嶽活寫** それは、ホーム・ムービーから始まった

□ 開催地 9月4日 名古屋市 11月6日 富山市 11月20日 大町市